
清廉潔白

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清廉潔白

【Nコード】

N8941P

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

政治家、官僚の腐敗に辟易していた国民は清廉潔白にして有能な政治家クロムウエルを選んだ。確かに彼は優秀だったが、こうしたことが実際に起こるのが人間の世界です。

第一章

清廉潔白

この国の政治は腐敗していた。

政治家も官僚も殆どが賄賂を取り私腹を肥やしていた。そしてそれが横行した。極めて深刻な社会問題とさえなっていた。

誰もがこの状況を何とかしたいと思っていた。

「もう汚職はな」

「ああ、沢山だ」

「新聞を開いてテレビをつけたら汚職の話だ」

「他に話はないのか？」

「全くだよ」

国民達はうんざりとしていた。そうしてであった。

彼等は望むようになっていた。清潔さをだ。

「汚職を一切しない政治家な」

「そんなのいないか？」

「誰かいないか？」

「そうだよな」

こう言って憚らない。そうなるのは当然だった。

汚職に濃み清潔な指導者を求めていた。その中でだ。

彼が出て来た。その名はクリスト・クロムウエルという。謹厳実

直にして厳格極まる人物である。そしてこの人物はだ。

汚職とは縁がなかった。それも全くだ。

家は小さく粗末なものだ。着ている服も粗末な古いものだ。蓄財もなく愛人もいない。そうしたことは一切なかった。

しかもだ。極めて優秀であった。統率力がありしかも政治家としてのビジョンもあった。部下もよくまとめていたのである。

こうした人物が出ればどうなるか。最早自明の理であった。

特に清廉潔白なところがだ。国民から注目を浴びた。

「おい、クロムウエルつてな」

「ああ、凄いやな」

「賄賂は絶対に受け取らないらしいな」

「しかも愛人もいないしな」

「親戚を要職につけたりしないし」

「蓄財もないつてな」

その清潔さが国民の人気を集めた。そうしてである。

「あの人ならな」

「俺達の大統領になれるな」

「そしてこの国を変えてくれるぜ」

「清潔な国にな」

こうしてであった。彼は周りから大統領に推された。そして彼もそれを受けたのである。

「わかった」

まずはこう言って頷いた彼だった。岩の様なその顔には何の笑みもない。身体は引き締まり贅肉も一片もなかった。

「それではだ」

「受けてくれますね」

「大統領選挙」

「是非」

「国民の為に、この国の為に」

彼は言った。

「我が身を捧げましょう」

「クロムウエル万歳！」

「クロムウエル万歳！」

すぐに彼を讃える声があがった。

「この国を救って下さい！」

「是非！」

こうして彼は選挙に出た。彼はあらたな政党を率いて出馬したがそれは圧倒的な支持を得た。

その同志達も皆清廉潔白で精悍な者達だった。人気が出ない筈がなかった。

彼は選挙に勝った。国民の票は九割近くが彼に集まった。そしてその政党もだ。議会の四分の三を制したのであった。

まさに圧勝だった。それからだった。

彼は大統領になり宣誓を行いだ。すぐに政治をはじめた。

汚職を禁止し厳罰まで定めた法案が議会を通った。実際に収賄やそういうことをしていた政治家や官僚は次々と逮捕された。

そのうえで政治改革を行い統治システムはかなり合理的なものになった。政治家の権限も大きくなり官僚は厳しく監視されるようになった。政治家の権限も大きくなり官僚は厳しく監視されるようになった。

その政治家もだ。少しでも汚職やミスがあれば大統領に即座に罷免されるようになった。極めて中央集権的なものになった。

国民はそれを見てだ。素直に喜んだ。

「クロムウエルはやってくれているな」

「ああ」

「全くだ」

こう言って笑顔で彼を讃えていた。

「彼が知っていればな」

「それで問題ないよな」

「頼りになるよ」

「俺達の為にしてってくれてているしな」

確かに彼は私になかった。あくまで国民の為、国家の為に考えており動いていた。しかしであった。その彼がなのだった。

第二章

その権限を集めた彼はだ。こんな法案を出してきた。

「ええと、朝早く起きる？」

「そして歯磨きを忘れない」

「顔も洗う」

「何だこりゃ」

国民達はこの法案にまずは面食らった。

「こんなの常識じゃないのか？」

「なあ」

「そうだよな」

誰もがいぶかしむ。しかしクロムウエルは言うのだった。

「汚職は何故起こるか」

話すのはここからだった。

「腐敗は何故起こるか」

彼はまた言った。

「まずは規則正しい生活からだ。そこから己を律しないと汚職や腐敗といった汚いものは絶対になくならないものなのだ」

「それは確かにな」

「まずは己を律すること」

「それが」

「そつ、だから私はこの法案を提出する」

そつだというのである。

「この国の為に」

「よし、じゃあ早寝早起きだな」

「これからはな」

「そつだよな」

誰もがクロムウエルの言葉に頷いた。規則正しい生活がいいことは言っまでもなかったからだ。この法案はすぐに成立した。

そしてだ。次はだ。

「ええと、次はこれか」

「毎日風呂に入って」

「髭も剃る」

「トイレの後は手を洗う」

「うがいもか」

「清潔にしなければならぬ」

彼はまた言った。

「やはり己を律する。それに清潔にすればだ」

「疫病とかもならないしな」

「まあ今時そういうのもないけれどな」

「それでもいいことだよな」

「清潔なのはな」

国民達はここでも彼の言葉に頷いた。

それであった。この法案も成立した。だがこれで終わりではなかった。

次は服装を常に整えること。ローライズのズボンやその他のだらしなないとされる格好は禁止されてしまった。髪型もだ。

「身だしなみは整える」

彼はまた言ったのだった。

「服装の乱れが心の乱れだ」

「えっ、じゃあ俺駄目なのか」

「俺もか？」

そのローライズの若者や髪をぼさぼさに伸ばしている面々が驚きの声をあげた。

「これからはこの格好できないのかよ」

「参ったな」

しかしこの法案も成立した。やはりだらしなない格好もよくないと皆思ったからだ。それでまたしてもクロムウエルの法案は成立した。次には産地偽装の厳禁、腐った食べ物には食べない、そして食べ物

は常に清潔にしておくこと、冷蔵庫や冷凍庫の清掃の徹底、おまけにゴミの捨て方等まで定められた。

そして食べ物は腐る前に絶対に食べることも決められた。

「食べ物を粗末にはいけない」

だからだというのである。

「ものを粗末にすることはそこから心が腐っていく」

またしても道徳的な言葉であった。

「だからだ。それは駄目だ」

「その通りだけれどな」

「それでも。何か」

「ああ、ちよつとな」

「細か過ぎるよな」

「何でもかんでも」

国民達もいい加減窮屈になりだしていた。

第三章

「確かにその通りだけれど」

「何ていうか。がんじがらめはな」

「よくないんじゃない」

しかしだ。クロムウエルは言うのであった。

「全てを決めていかないとまた腐敗や汚職が横行する」

これが彼の主張だった。

「腐敗は僅かな気の緩みから起こるのだ」

誰もこの言葉に反論できなかった。そうしてであった。

この法案も通った。やがて家の隅々から街や村の何処もかしこも塵一つ落としてはいけないことまで定められたのだった。

ゴミは決められた場所に捨てる、トイレや洗面所は水滴一つでも汚しては駄目である、靴は常に磨く、ただし床に靴墨の跡は着けない。服は常にアイロンをかけてしかも正装でなければならぬ。

食事のマナーもであった。どんなものを食べても常に礼儀正しくだった。

「これじゃああれだよな」

「ああ、日本の懐石かフレンチだよ」

「ただインスタントの Pasta 食べてるだけでもな」

「それでもこうして」

法律で細かく定められた規定に従って誰もが食べることを強いられていた。見れば置く場所まで厳密に定められている。

「ええと、次はか」

「ああ、牛乳だ」

「牛乳を一口飲んで」

「そこからパンは」

「あと私語は厳禁だったな」

そこまで決められていた。

「何でもかんでも駄目駄目駄目」

「禁止の羅列だな」

「全くだよ」

国民もいい加減疲れてきていた。

「下品な料理方法も駄目」

「キッチンは使用前と使用後はいつも奇麗に」

「常識だけれどな」

しかしその常識が、なのだった。

「こんなに細かく決めなくてもな」

「スポーツだつてな」

「ああ、娯楽だつてな」

「全部な」

何でもかんでもだった。とにかく細かくそのルールが定められた。

野球もであった。乱闘はなくなった。応援もまさに紳士のものだ。

球場も奇麗だ。ところがだ。

何か違った。そこはだ。

「オーウェル殿、頑張つて下さい」

「そこで打つて下さいね」

「御願います」

皆叫ばずそれぞれの席に座つてだ。飲み食いもせずに応援だけをしていた。

それはサッカーでもラグビーでもだった。どのスポーツの応援でもだ。

スポーツばかりではなく学校でもだ。確かにいじめもなければ校内暴力もない。授業も整然としていた。しかしであった。

この国に来た者達はだ。誰もがこう言った。

「人間がいない」

「何も動いていない」

「ショーウィンドウと同じだ」

「何がいるのだ、ここには」

自然も保護されているが全てが整然と整えられている。野生動物の絶滅もない。しかしその数や日常まで完全に監視されている。

何もかもがであった。管理されていたのだ。

人々は笑いもせず怒りもせず涙も流さずだ。葬式の際には自然に涙が流れてそれで終わりだ。そこには何の感情もない。

そんな国だった。そしてだ。

全てはクロムウエルが管理していた。政府も議会も裁判所もだ。彼の言葉こそが正義と信じ彼の言葉を実行するだけだった。

「ではこの法案に賛成の方ご起立下さい」

下院議長が言うのであった。全員すつと席を立つ。そうして。

「満場一致で可決しました」

これで終わりであった。何もかもがだ。

そうした国になっていた。確かに豊かで何でもあり文化もある。

内戦はおろか差別や民族問題もない。国内のあらゆる民族が平和で平等に暮らしていた。

だが誰も表情はなかったただ動いているだけだった。そんな国だった。そうした国になったこの国はだ。何もなくなっていた。あるのはだ。ただクロムウエルの言う道徳と清潔があるだけだった。

やがて彼が鎖国をし外からの一切の汚れたものを排除すると言った時。この国はもう誰もが知ることのない国になった。

清廉潔白、だがその先にあるものはだ。人ではなかった。人がいる国ではなかった。ただ機械だけがそこにいたのであった。

清廉潔白 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8941p/>

清廉潔白

2011年1月2日21時25分発行